

クツクツと愉しげに笑う男に反論しかけるが、先程の射  
精感を思い出すと何も言えなくなってしまった。

言葉途中で押し黙る自分に、男は更に追い打ちをかけて  
くる。

「下の口だけでなく上の口も素直になるように奥をたっぶ  
り弄ってやろう」

「!? や、やだ……」

「何もそんなに怯えることはない。言うことを聞いてボス  
になると約束するか、素直になって全てを受け入れれば楽  
になれる」

「う……」

楽になれる、という言葉に一瞬心が揺れたが、マフィア  
のボスになることも、男の凌辱も、すぐには受け入れるこ  
とは出来なかった。

なかなか反応を示さない自分に、男はやれやれと言いた  
げに溜息をつく。

「まただんまりか……まあいい。素直にならないならそう  
なるまで続けるだけだ」

「っ!? あくっ」

男の指が再びくの字に曲げられ、そのまま中でぐりぐり  
と動き始めた。

「あ、あ、あっ、や、止めっ……」

不快感がぶり返してくるが、漏れ出た声のトーンは何故

だか一段上がってしまったている。

「やはりココを弄ると少しは素直になるようだな。ほら、  
もっと感じて、もっと素直になりな」

「や、違……っああん!」

自分の変化に戸惑っていると、男はそれを快感によるも  
のだと受け止めたのか、どこか嬉しそうに言いながら指の  
動きを更に早めた。

内をぐちゃぐちゃに掻き回すようにされ、自分の意思と  
は無関係にビクビクと腰が跳ねてしまう。

「う、動かさないでえ!!」

このまま奥の方を弄られ続けたらおかしくなってしまう  
そうで怖くて、男の指を振り払うように尻を振り、腰をく  
ねらせた。

だが男の指は逃れようとする腰を追って更に深くへと入  
り込んでくる。

「そんなに尻を振って……悦んでいるのなら、もう一本増  
やしても大丈夫そうだな」

「なっ……」

逃れるために取った行動が却って男を煽る結果になって  
しまったことに愕然としてみると、男の指が入り口付近ま  
で引き抜かれ、恐怖と恥辱にヒクヒクと震える穴に新たな  
指が当てがわれた。

「こ、これ以上無理っ! 無理、無理だよおっ!!」